

【君が代】 きみがよ

・わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで

『古今集』よみ人知らず

国歌『君が代』の詞がこの賀歌を出典とすることは、皆様ご承知のとおりです。

卒業入学シーズンには各学校こぞって歌って、あるいは歌わされているようです。

『君が代』の大意は「あなた様の代が永遠に、細石が大岩となり苔が生えるまでに栄え長命が続きますように」という意味になります。

さらに細かく語意を検討していきましょう。「君」とは敬意を含んだ You で、古くは男性に対する呼び方でしたが平安時代以降は女性も対象に使われているようです。「代」は人の一生を単位とした時間表現ですので、「君が代」は自分の主君の時代という意味になります。「君」は天皇にのみ限られた敬称ではありません。しかし、勅撰集の賀歌に属することと全体の意味や雰囲気からこの歌の「君」が天皇のことであった可能性は高いのではないのでしょうか。

「八」「千」は多数を表しますので「千代に八千代に」はいつまでも、永遠にという意味になります。

「さざれ石」とは小石、砂のことです。「細石」と表記します。

さて、「さざれ石の巖となりて」の解釈がこの歌の最も難しいところでしょう。

9世紀中ごろ、中国は唐代に段成式[だんせいしき]が著した『酉陽雜俎』[ゆうようざつそ]という漢籍があります。神話・伝説・故事・風俗などに触れた長編随筆集、あるいは伝奇集ともいわれています。(平凡社東洋文庫所収)

この書物の中に、川で網にかかった石を寺に置いたら四十斤の岩になったという話が見えます。この話は小石が長い年月をかけて岩(巖)となるという中国の民間信仰に基づいています。

岩が歳月の中で風化し砕けて小石になることは容易に理解できますが、中国では創世記的時間の中では小石が岩になると考えていたのでしょうか。あるいは万物は気の集散によりなる、あるいは消滅するという気論を根拠に気が集まれば石も増殖すると考えたのでしょうか。いずれにしても「さざれ石の巖となりて」も永遠の時間の比喩的表現なのです。

『古今集』仮名序にも「浜の真砂の数多く積もりぬれば、今は飛鳥川の瀬になる恨みも聞えず、さざれ石の巖となる喜びのみぞあるべき」とあります。

「苔のむすまで」は苔が自然に生えるまでという意味ですので、これも長い歳月の表現です。

『古今集』成立以前の日本では中国文化の影響が色濃く、諸侯は天皇に漢詩で祝辞を述べるのが普通でした。894年遣唐使廃止の頃から始まる国風文化の時代、徐々に公式な場でも和歌で祝辞を述べるようになったのです。この歌が中国的教養を含んでいることは、そうした時代の過渡期であったからではないのでしょうか。

さて、作者はよみ人知らずですが、よみ人知らずには3つのタイプがあると私は理解しています。ひとつは作者が分からなくなった場合。ひとつは身分が低すぎるか政治的失脚などの事情で作者の名を出せない場合。さらにひとつは河原の石が丸みをおびるように、長い年月をかけて歌い続けられた歌が少しずつ言葉を変えていった場合。つまり、作者が個人でなく時間と集団というべき場合です。

「わが君は…」の歌は唐文化から国風文化へ移行する時期の歌で『古今集』編纂時期からそんなに時代を遡らないようですので、作者が分からなくなった歌ではないのでしょうか。

現在各地方には実物というさざれ石や「わが君は…」の歌の作者の伝説が伝わっているようですが、史実としての根拠は薄いようです。

さて、本歌の「わが君は…」が「君が代は…」になったのはいつからなのでしょう。私の知る限りでは明治初頭の『和漢朗詠集』に「君が代は…」となっている流布本を確認していますが、それより古くは分かりません。曲が付いたときの改定かも知れませんね。

『君が代』の曲は当初明治二年にイギリスの歩兵隊の軍楽長、ジョン・ウィリアム・フェントンが作曲しましたが普及には至らなかったようです。明治十三年に宮内省式部寮雅楽課の奥好義が作曲し、林広守が補作して現行曲が出来上がりました。雅楽的な曲であることが特徴です。

明治二六年文部省が祝日大祭日唱歌に指定したことが習慣的な国歌となる基となったようです。法的には平成十一年「国旗及び国歌に関する法律」から国歌となりました。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~